

慶谷壽信先生の学問などについて (3)

—インド学1、二合音と反切—

附：慶谷壽信「反切と仏教文化」

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することになりました。

\* \* \* \* \*

中村：前回の対談で、慶谷先生がインド学に関心を持っていたという話が出ました。お書きになった論文でも、古代インドの音声学や漢訳仏典の音訳漢字について触れたものが多少ありますね。

吉池：そうですね。その取り上げ方に濃淡はありますが、インド学に多少なりとも関係のありそうな著作をピックアップして、ザックリと分類してみると次のようになります。

【総合】

1978. 10 仏教文化と中国語学, 『中国語』 225

1987. 9 『音韻のはなし —中国音韻学の基本知識— 』（光生館）の訳者注

【反切の起源】

1974. 10 中国音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——, 『入矢教授小川教授退休記念中國文學語學論集』筑摩書房

1988. 6 反切と仏教文化, 『中国古代韻書』（趙誠著、中華書局、1980年）訳注【未公表】

【頭子音の認識】

1980. 3 『玉篇』巻末に附された「五音聲論」について, 『人文学報』 140

1981. 10 「字母」という名称をめぐって, 『日本中國學會報』 33

2000. 3 国際音声字母の中国流の受容, 『人文学報』 311

【音訳漢字】

1980. 7 歌戈魚虞模の音価をめぐって, 『中国語』 246

1997. 3 歌戈魚虞模古讀論争の概略, 『古田敬一教授頌寿記念中國學論集』汲古書院

1997. 6 歌戈魚虞模古讀論争の学史上の意義, 『橋本萬太郎記念中国語学論集』内山書店

吉池：最初に挙げた「仏教文化と中国語学」は、「訳経史の出発点は、仏教文化の中国語学に与えた影響を考える上での出発点でもある。」として、後漢の桓帝の初年（147 A.D.）に洛陽に来て訳経に従事した安世高の事績と背景を1ページにまとめたものです。

中村：この「仏教文化と中国語学」は、その題目から想像できる内容とはやや異なり、大部分が安世高の背景の国となるパルティアとインド・パルティアの説明に費やされていますね。中国語学との関連に取り組む前の準備であり、徹底して周辺から固めるという研究手法の一端を垣間見ることができます。なお、前年の1977年には名古屋大学の集中講義でこの問題を扱っているようですから<sup>1</sup>、この時期の重要な関心事であったと言ってよろしいかと思います。とはいえ、どう見てもこの文章はタイトルから予想される内容には踏み込んでいません。看板に偽りあり、というのは言い過ぎでしょうか。

吉池：「仏教文化と中国語学」と題しながら、そのほとんどを安世高の出身地の説明に費やすというのは、確かに戸惑いを覚えます。しかし「安世高は、インド・パルティア人であって、仏教の中心地西北インドで仏教に触れ、仏教を修学した。こう仮定すると、彼の音訳漢字の特色なども無理なく説明できそうに思われる。」と述べていることから、漢訳仏典の音訳漢字を利用して中国語音韻史を考える際の土台作りをしたのだと考えられます。

中村：なるほど。そう言えば、『音韻のはなし —中国音韻学の基本知識—』の中でも、「漢代の梵語対音では、Buddhaを「浮屠」と訳している」（199頁）とする李思敬氏の記述を批判して詳細な訳注を付し（216頁）、「浮屠」を単純に梵語（Sanskrit）のBuddhaの対音とするのは妥当ではないとして、俗語形Buddhoと関連付ける説も紹介しています。このことと合わせて考えると、「仏教文化と中国語学」で安世高の背景にこだわったのは、漢訳仏典の音訳漢字の研究には梵語だけでなく俗語や周辺言語にも目を配るべきだという態度を表明したものと見なすこともできる、ということでしょうか。

吉池：読む側からすると、そのような意図をもっとはっきり書いてほしいという気もしますが。

中村：慶谷先生の論文や研究ノートには時として、このように読み手を悩ませるものがある

---

<sup>1</sup> 慶谷先生は2010年6月26日に名古屋大学中国語学文学会の第19回例会において、「言語学者有坂秀世の生涯」という題目で講演し、その内容は同じ題目で『名古屋大学中国語学文学論集』22（2010年12月10日付）に掲載された。その末尾に田村加代子氏による後記が付されており、その中に「昭和四十三年三月に東京都立大学に赴任された後も、昭和五十二年四月から五十四年三月まで名古屋大学文学部非常勤講師として集中講義を担当されました。昭和五十二年度の講義題目は「仏教文化と中国語学」、昭和五十三年度の講義題目は「中古音概説」でした。」とある。

りますね。我々是一个の論文を完結したものとして読むことに慣れていますが、慶谷先生の場合、それぞれの論文は一応完結した形をとっていますが、実はもっと大きな構想の一部分だということがあります。それは他の論文を合わせ読んで初めて分かるのですが。

吉池：そういう意味では、反切の起源に係わる著作の最初に挙げた1974年の「中國音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——」も、私には、なんとも不思議な論文に思えるのですが、反切の起源と仏教文化というテーマのなかで、どのように位置づけたらよいのでしょうか。

中村：おっしゃる通り不思議な論文です。この論文だけを読んでも、その意図がよくわかりません。論文の内容は、顧炎武が反切の起源に関わるものとして挙げたいわゆる「二合音」について検討し、「反切にはまだ近くない」という結論を述べたものです。他の論文を読まずにこの論文だけを読むと、消化不良というか、肩透かしを食らった形になります。「蒺藜→茨」のように二音節が合わさって一音節になる、いわゆる二合音は、仮に反切と関係するものとしても、反切の直前段階ではないということなのですが、では反切の起源は何かという肝心な部分には論が進みません。

吉池：つまり、慶谷先生の主たる関心は反切の起源を突き詰める点にはないということですか。

中村：そのように考えざるを得ません。そのことは論文のタイトルからも窺えるように思います。「中國音韻學史上の一問題 ——顧炎武の「二合音」について——」というものですが、このタイトルからは反切の起源を追究しようという意図は読み取れません。関心はあくまでも「学史」なのでしょう。何を契機として反切が創出されたかについては、有力な説として、①古来の二合音、②仏教伝来に伴う言語接触（仏典漢訳）の二つが考えられてきた訳ですが、慶谷先生の関心はどちらが正しいかということよりも、それらの説がいかんして生まれ醸成されてきたかというその経緯を明らかにすることにあつたようです。冒頭に近い部分で、方法論として次のように述べています。

「二合音を反切の先驅とみなすばあい、その態度は、遠く淵源をさぐるというよりは、二合音から反切の段階への歩みが連続した中國語觀察の独自の進展によるものであつて、外來の影響、具體的には佛教文化の影響を直接大きくは認めないとする傾きをもつ。従つて、問題は、二合音が反切に近い段階にあるかどうかを検討することになる。」

このような方針によって、顧炎武が示した25例について、二合音と反切との近さを検証した結果、「反切にはまだ近くない」という結論に至つたのです。

吉池：どうして顧炎武を取り上げたのでしょうか。

中村：古音の知識のある顧炎武が反切と二合音を関連付け、後に大きな影響を与えている点を重視したのでしょう。二合音を反切の前段階とする考え方はすでに宋代からありましたが、それらは観念的なものでしたから検討の対象にしにくいものでした。しかし顧炎武は上古音の知識を利用して二合音をとらえたので、その部分を検討対象にした訳です。顧炎武の挙げた 25 例については、「驚くべきことに、あるいは當然のことというべきか、25 例すべて合下字と被合字<sup>2</sup>とは、顧氏の體系で同部となる。顧氏は、みずからの上古音の體系よりみて妥当と思われるものを二合音として選んだのである。」ということになりますが、顧炎武の体系はいまだ精密ではないとして、董同龢の体系を用いて再検討した結果、合下字と被合字が同部となるものは 16 例に減ることになります。

吉池：それで「反切にはまだ近くない」という結論になるのですか。しかし、全体としてみれば、顧炎武の挙げた例が反切の構造に類似していることは明らかなので、「反切にはまだ近くない」というのは何だかはっきりしない表現に思えますが。

中村：そうですね。しかし検証可能な手段によった場合、そのように判断せざるを得なかったのかも知れません。

吉池：二合音を双声疊韻とも関連させているようですね。

中村：顧炎武の挙げた 25 例中 12 例において、合上字・合下字間の韻母部分が同一あるいは近似である、つまり疊韻の関係にあるとします。そして、次のように結論づけます。

「たしかに雙聲疊韻を用いる習慣は、反切表記法の出現にある役割を果たしているであろう。二合音というものを認めるとすれば、その比較的精度の高いものすら、なおこの（雙聲）疊韻の延長線上にある。そして、おそらく雙聲疊韻が反切の直前の段階ではないように、二合音も反切直前の段階ではないであろう。二合音の存在を指摘することは、雙聲疊韻を指摘することよりは一步を進めているであろうが、反切にはまだ近くないというべきである。」

吉池：二合音を仮に反切の先駆だとして両者を比べてみた結果、二合音が反切の「直前の段階」ではないとなったならば、当然のことながら、二合音と反切の間に他の影響、たとえば仏教文化の影響などを受けた段階を認めてもよいということになりますね。

中村：厳密に言えば、反切の創始に仏教文化の影響があった可能性を検討する条件がやっ

---

<sup>2</sup> 「合下字」「被合字」は二合音を仮に反切に見立てた慶谷先生の造語で、それぞれ「反切下字」「被切字（＝帰字）」に相当する。「反切上字」に相当するのは「合上字」となる。

と整ったということでしょう。そのような観点から、反切の創始と仏教文化との関わりに焦点をあてて述べたものが1988年の「反切と仏教文化」ということになります。

吉池：「反切と仏教文化」はA4サイズで5枚の文章です。これは、趙誠著『中国古代韻書』（中華書局、1979年）の訳注を作成する授業において、先生自らも担当された未公表の原稿です。ご担当部分の直前の本文段落は、中国古代の急読と緩読の法に言及します。たとえば、「乗」は「寿夢」の合音であり、急読すると「乗」となり緩読すると「寿夢」となるなど、いわゆる二合音の例を列挙します。これに続く段落が慶谷先生の担当箇所となります。本文の内容は、「漢代に至り、わが国はようやく外国と文化・経済の上で交流をもった。とくに仏教の伝来により、古人は表音文字による言語との接触が多くなり、音のつづり合わせに対しても深い認識を持つようになった。反切の成立は、おそらく上に述べた二つの条件によるのであろう。しかしながら、わが国固有の急読による合音の法が内因であり基盤であり、外国語の音のつづり合せの法による啓発が外因である。」（訳は吉池による）<sup>3</sup>であり、これに対する注となっています。注の形式を借りて、慶谷先生ご自身の考えをまとめたものとみてよいでしょう。種々の説を紹介する学説史の体裁となっており最後にまとめがあります。まとめは「以上を要するに、反切の創始に仏教文化が影響したか否か、いずれにせよ、これを証拠づけることは容易ではない。仏教文化の影響は、畢竟するに、漠然と雰囲気として考えられているにすぎない。ただ、それ（影響説をさす。吉池補）が受容される過程で、中国及び中国の伝統的な学問をとりまく状況の変化があったことだけは、重ねて注意しておきたい。」とあります。

中村：中国及び中国の伝統的な学問をとりまく状況の変化とは何を指すのでしょうか。

吉池：「外来影響説の受容は、中国の伝統的な学問の権威がゆらぐにつれて進展して来たのであるが、それはただ観念的に受容されたのではない。直接の契機は、清末民国初の文字改革運動である。その実践の苦しみの中から、音標文字との接触を重視するという観点が、実感としてうみ出されたと考えられる。」とあります。

中村：つまり、反切の創始に対する仏教文化影響説は具体的な証拠に基づいたものではなく、自国の権威がゆらぎ、外来文化の知識が増すという当時の社会状況の変化が作り出したものという訳ですね。

---

<sup>3</sup> 到了漢代，我國逐漸和外國有了文化和經濟上的交往，尤其是佛經的傳入，古人對音素文字的語言有了愈來愈多的接觸，對於拼音也就有了較深的認識。反切的產生，大概就是由於上述的兩個條件。不過，我國固有的急讀合音法是內因，是基礎；外語拼音法的啓發是外因。（7頁）。

吉池：はい。事実がどうであったか、というよりも、学説が生み出された背景に関心が向くというのは慶谷先生の学問の特徴といってもよいのではないのでしょうか。

中村：考えてみれば、反切に仏教文化が影響したという事実があったかどうかは甚だあいまいですが、そのような学説の誕生は紛れもない事実として存在しています。あいまいな事実よりも学説そのものを追究することは慶谷先生らしい方法かも知れません。

### 【添付資料】

遺稿「反切と仏教文化」の公表をご快諾くださった慶谷家の皆様には感謝申し上げます。なお、講義にあたって配付された原稿の題は「反切と仏教」ですが、講義の中で口頭にて「仏教文化」と訂正がなされたため「反切と仏教文化」としました。

### 反切と仏教文化

第二稿 1988. 6. 16

慶谷壽信

反切の創始が孫炎から服虔、應劭へと時代を引き上げられたこと、等韻学に対してではなく反切の創始に対して仏教文化の影響を認めるようになったことは、清末以降、中国の伝統的学問が動揺をきたしたことと切り離しては考えられない。

清末以降の学問の動向については、ここに細説すべきものではないから、貝塚茂樹『中國古代史學の發展』（弘文堂書房、昭和21年12月）にゆずる。ただし、古代インドの言語、文化に対する価値観の上昇も無縁ではないと思われるので、そのことだけをここに付説しておく。

1786年2月2日、Bengalの判事であったWilliam Jones (1746-1794)は、Calcuttaのアジア協会の第三回記念講演会で、サンスクリットとギリシア語、ラテン語等との親縁関係を示唆する発言をおこなった。その後、ヨーロッパ、就中プロシア（ドイツ）における言語研究はサンスクリットを中心にして展開し、19世紀に印欧比較言語学が成立する。

ここで蘭田香勲氏のことばを借りていえば、

そもそも印欧比較言語学の成立が一般学界の上に与えた影響は、想像以上に甚大なものがあって、人によればこの一事実の中に、十五世紀におけるギリシア文芸の復興全体に匹敵するところの、人類精神史上の重大事件を見ようとする人もある位である。事実、人類の歴史に対する少なくともヨーロッパ人の見方は、このギリシア＝インド同一系統観によって一変したといってもよい。十九世紀中葉前後のヨーロッパで新たに成立し、ないしは新しい活力によって再出発した多くの学問は、すべて直接、間接にその影響下にあったのである。

『ドイツ文学における東方憧憬』（創文社、昭和 50 年 7 月）p. 231。

サンスクリットの発見、ないしはサンスクリットがヨーロッパ諸語の祖語かもしれないという予感、ダーウィンの進化論に匹敵するものだったという。進化論は、中国では大きな影響を与えたと思われるが、比較言語学上におけるサンスクリットの位置について知る人は多くなかったかもしれない。しかし、中国においても、一部の人々にはサンスクリットや古代インドの言語研究のことが知られていた。

張世祿『語言學概論』（中華書局、民国 23 年 3 月）は、サンスクリットがヨーロッパに紹介されてから、William Jones にはじまり、Friedrich Schlegel、さらには Franz Bopp、Jacob Grimm、Rasmus Rask に至って、印欧比較言語学が成立したという、サンスクリットの果たした大きな役割を記している（pp. 11-12）。また、張世祿編『百科小叢書 語言學原理』（商務印書館、民国 22 年 6 月）pp. 3-4 参照。

そして、つぎのようにのべている。

原來梵文在印度本地的情形，正像拉丁文之在歐洲同爲一般青年誦讀古代文獻的必須的工具。不過在印度地方，因爲要保持數千年前經典上原來的音讀形式，對於拼音學理和語詞組織的研究特別發達。這種學識早已隨着佛教的傳播輸入於中國，促進了中國音韻和文典的研究，可是沒有其他科學的輔助，不能正式產生語音和語言的科學。到了近世的歐洲，梵文拼音學理得到生理學等等的輔助，就成立西洋的「語音學」(Phonetics)；又應用歷史的方法，追迹各個語詞組織和演化的由來，就成立西洋的「語源學」(etymology)。……（『語言學概論』p. 12）

ここにいう「拼音學理」とは、張氏の理解においては、主として連声 (sandhī) のことを指すと思われる。それは即古代インドの音声学 (Prātisakhyā あるいは Śikṣā) そのものではないし、その精華であるともいえない。古代インドの音声学が Henry Sweet (1845-1912) 以下の音声学に大きな影響を与えたということは、張氏の考慮の外にあったようであるが、サンスクリットやそれをもとにした学問を評価していることは、すこしも疑う余地がない。

さて、本文では内因、外因二つの条件を考えている。

その外因、すなわち外来影響に関するごく一般的な見解は、つぎのようなものである。

服虔爲漢靈帝獻帝間人、是反切之興時當漢末、固無疑矣。……。至若反切之所以興於漢末者、當與佛教東來有關。

周祖謨「顏氏家訓音辭篇注補」p. 206（『輔仁學誌』第十二卷第一第二合期所載、1943 年 12 月。また『漢語音韻論文集』『問學集 上冊』所収。）

具体的な関係についてはのべられていないが、趙誠氏のいうごとく、仏典の伝来、言語の接触が考えられているとみてよからう。一体、二つの言語、しかも系統の異なる言語の接触があるばあい、その疎通を円滑ならしめるために多大の工夫、努力が払われること、ましてその言語が高度の文化を背景にもっているばあいには、なおさらそうであることはいうをまたないが、単に仏典の伝来、言語の接触がその要因であるとは思われない。

靈帝 (167-189 A. D.)、獻帝 (189-220 A. D.) の時代が問題とされたのは、それが服虔、

應劭の生きた時代であったからにはほかならないが、さらに補足すれば、仏教伝来の年代ではなく、ほぼ仏典漢訳の初期と一致することに注意したい。仏典の伝来、言語の接触も、仏典漢訳の段階に至ってこそ、影響の要因となり得たのである。

史実として認めうる訳経は、安世高、支婁迦讖（略して、支讖）によってはじまった。安世高は、桓帝の初年（147 A. D.）に洛陽に来て、翌建和二年（148 A. D.）から靈帝の建寧二年（169 A. D.）まで二十二年間、訳経に従事し、支讖は、桓帝の末年（167 A. D.）に洛陽に来て、靈帝の光和（178-183 A. D.）、中平（184-189 A. D.）年間、約二十年ほど訳経に従事したという。

安世高、支讖については、梁、僧祐『出三藏記集』（大正藏第五十五卷「目錄部」所収）卷第十三「安世高傳第一」「支讖傳第二」など、および宇井伯壽『譯經史研究』（岩波書店、昭和46年3月）を参照のこと。

すでにのべたごとく、外来影響説の受容は、中国の伝統的な学問の権威がゆらぐにつれて進展して来たのであるが、それはただ観念的に受容されたのではない。直接の契機は、清末民国初の文字改革運動である。その実践の苦しみの中から、音標文字との接触を重視するという観点が、実感としてうみ出されたと考えられる。そのはじめは、方毅編纂『國音沿革』（上海國語師範學校講義第一種、商務印書館、民国13年9月。）に付せられた吳恆氏の長文の序にみえる。吳氏は、王照、勞乃宣氏などと並んで、文字改革運動の中心人物の一人であった。

一是反切的起源、說是歸根到我們古代已有雙聲疊韻的細胞、撒播在空氣中、故觸着了便自然發明了反切、這是不能不承認的。但是不先不後、却在佛說大行的曉光中發生了反切、恐怕是中學雙聲疊韻的體、加進了西學梵文的用、才得到實現、必未可定。（p. 3）ただし、ここには当時よく用いられた体用の説がみられ、趙誠氏の「内因」、「外因」を折衷した考えに相当する。吳説は比較的あいまいな表現をとっているが、音標文字に接すれば、音節の分析、観察が正確になり、それによって反切のごとき注音法の誕生が促進されたというのであろう。

吳説の基礎の上に、インドの影響を強調したのは、張世祿氏である。

（その1）此等以二字合成一者；反切之理、古人蓋早已知之矣。惟必至漢魏之間、此事始大風行者、則又以印度音理之輸入故也。漢末儒士、多談佛法、因有兼通音韻者。……由此、可知吾國韻書及反切之起源、與佛教之東來、梵文音理之輸進、至有關係者也。

『中國聲韻學概要』（商務印書館、民国19年4月）pp. 183-184。

（その2）中國音韻學的萌芽和發展、與梵文拼音學理的輸入、有密接的關係。……。

反切的方法、總是到了漢代末年、才形成、才發達。當時許多儒士、喜歡談談佛法、因之有深通音理的。佛教的傳播、梵文拼音的學理也因之輸入。……。中國反切的起源、實在是受了梵文拼音學理的影響。（詳吳稚暉國音沿革序）

『百科小叢書 音韻學』（商務印書館、民国21年11月）pp. 6-7。



前者は音声学に、後者は音標文字の書写法に主眼を置いているといえよう。しかし、前者の「音理」は、ことばどおりにとれば、音声学であろうが、すでにのべたごとく、張氏の考えとしては「連声」が意識されていたのではなかろうか。ところで、当時としては、これほど明確にインドの影響を認めるのは、少数意見であったと思われる。

以今考之，謂反切來自梵土者固誤。而謂始於孫炎者，亦未必盡得其實。漢以前兩字合爲一字，世以爲反切之雛形者，且不具論。叔然之前，王肅 應劭諸人所注之書，已用反切。…… 大概反切之法，在漢之末造，已有端倪。至叔然時，或受僧迦佛經翻譯之影響，促使儒生整理舊籍。於是反切之法，因以大甚。

姜亮夫『中國聲韻學』（世界書局、民国 22 年 6 月）pp. 310-311。

一般的には上記のごとき考えの方が抵抗なく受容されたであろう。しかし、これとても、かつては考えられないことであった。

以上を要するに、反切の創始に仏教文化が影響したか否か、いずれにせよ、これを証拠づけることは容易ではない。仏教文化の影響は、畢竟するに、漠然と雰囲気として考えられているにすぎない。ただ、それが受容される過程で、中国及び中国の伝統的な学問をとりまく状況の変化があったことだけは、重ねて注意しておきたい。